

九州大学総合研究 博物館ニュース

October 2009 No.13

新館長挨拶—新キャンパスにおける大学博物館のビジョン

松隈 明彦

今年4月から館長をつとめさせて頂いております、総合研究博物館の松隈です。これから2カ年、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、九州大学総合研究博物館は、2000年4月1日に創設され、今年で10年目を迎えました。7名の専任教員と3名の事務系職員からなる当館は、創設以来、展示や標本収蔵のスペースを備えた博物館独自の建物を持たないという困難な状況の中で各自の専門の研究を行うと共に、学内に蓄積された学術標本の実態調査と整理・公開、大学の教育・研究を社会に紹介する展示活動(公開展示、特別展示、平常展示、サテライト展示)、大学教育(学芸員資格関連科目、学部・大学院教育)、社会教育(公開講演会)、広報活動(博物館概要、年報、研究報告、博物館ニュース)等を通して、学内外の教育と研究の支援を行ってきました。創設10年目の節目の年、大学執行部からは「5年目評価・10年以内組織見直し」制度に基づく評価により、新キャンパス移転後における総合研究博物館のビジョンが問われています。これを機会に、大学博物館がこれから進むべき方向を、博物館スタッフ、運営委員会と共に、外部識者の意見を参考に考えてみたいと思います。

大学博物館のあり方と将来構想については、教員会議でたびたび議論すると共に、「新しい大学博物館を考える会」の提言(2003年)や「外部評価」(2006年)により、外部識者の

意見を聞いてきました。また、大学博物館等協議会の一員として、2007年からは協議会副会長校、2009年からは会長校として、協議会総会や協議会の下部組織である博物学会の研究発表を通じて、各大学博物館の事業と教育・研究活動を学び、各館が直面する諸問題についての情報を共有してきました。

これらを総合して考える新キャンパスにおける九州大学総合研究博物館のビジョンは、(1)大学が所蔵する学術標本を利用可能な状態に整理・保存し、構築したデータベースなどを基に、国内およびアジアの大学や博物館と連携して、標本・資料に基づく高等教育・学際的研究の拠点となる、(2)全国横並びの大学博物館を目指すのではなく、九州大学の歴史と地理的な位置に根ざした独自の大学博物館を目指す、(3)多分野にわたる標本資料と各分野の専門の研究者を擁するという特性を活かし、博物館を利用した校外学習や生涯学習に対応することで地域と連携した博物館を作り、社会と大学を結ぶ窓口となる、というものです。

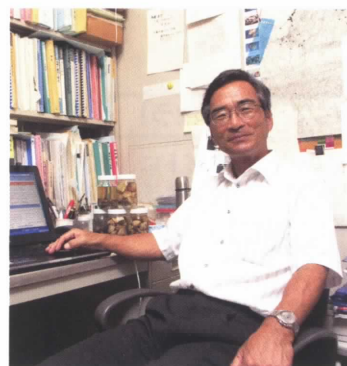
大学博物館が当初の設置目的に応えつつ、社会的責任を果たすためには、新キャンパスに全学の学術標本を収納できる標本庫スペースと、教育・研究のためのスペースを備えた博物館をできるだけ早く建てる必要があります。皆さんのご支援とご協力を心よりお願い申し上げます。

松隈館長プロフィール

松隈明彦 (MATSUKUMA, Akihiko)

専門: 古生物学、軟体動物分類学

九州大学大学院理学研究科博士課程中退、理学博士。九州大学理学部、国立科学博物館動物研究部などを経て、2000年より九州大学総合研究博物館教授。専門は古生物学、特に軟体動物の系統分類学、種分化の様式と機構に関する研究。最近では、移入種オオクビキレガイの移入経路と分布拡大の追跡調査やヤマボタルガイの生物地理などの、分子生物学的手法を用いた解析にも取り組んでいる。趣味は採集とテニス。糸島在住。福岡貝類談話会主宰、九大・糸島会幹事。



オオクビキレガイ情報収集中!

畑や庭、植え込みなどによく見かけたら、
matukuma@museum.kyushu-u.ac.jpか、FAX:092-642-4299
までご一報下さい。

平成20年度公開展示「奴国の南-九大筑紫地区の埋蔵文化財-」と筑紫図書館でのパネル展示開催のご報告

田尻 義了



「奴国の南」展示風景(九州国立博物館文化交流展示室において)

平成21年1月1日より2月8日まで九州国立博物館4階文化交流展示室にて、九州大学総合研究博物館平成20年度公開展示「奴国の南-九大筑紫地区の埋蔵文化財-」を開催しました。筑紫地区は米軍基地の跡地利用として、昭和53年より九州大学のキャンパスとして誕生しました。しかしながら、その地は『魏志倭人伝』などの史書に「奴国」として記載された地域であり、以前から遺跡の存在が指摘されていたため、九州大学では諸施設の建設に先立って発掘調査を実施してきました。長期にわたる調査研究の成果は、出土量の多さや諸般の事情から、これまであまり学内外で紹介されることがありませんでした。そこで、今回の展示では弥生時代、古墳時代、古代という時代別に、これまでの調査・研究で明らかになった成果をごく一部ではありますが展示しました。

期間中は40,161名の方に来場していただき、好評価をいただきました。特に香川県から出土した青銅器(巴形銅器)を铸造した铸型が筑紫地区から出土しており、関連資料として全国の巴形銅器を並べた展示は、多くの観覧者が立ち止まってケースをのぞき込んでいました。また、筑紫地区の一角には古代寺院が存在していた可能性があり、「寺」の字が墨書された土器や瓦、硯などの多数の資料を展示しました。これまで全く知られていなかった古代寺院の存在に、大学関係者だけでなく来館者の多くが興味を示していました。

「奴国の南」メイキングを見よう!

九州大学埋蔵文化財調査室のウェブサイト、「奴国の南」のメイキングが紹介されています。展示作成の裏側をかいま見ることが出来ますよ!

九州大学埋蔵文化財調査室トップページ>最近の活動
<http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~maibun/tennjisyasinn.html>

この公開展示をとおり、九州大学筑紫地区の教職員に共感していただき、平成21年5月16日、筑紫地区オープンキャンパスのイベントの一環として、筑紫図書館におけるパネル展示と若干の遺物展示を実施することになりました。パネルを12枚作成し、筑紫図書館のロビーで展示させていただきました。筑紫地区の教職員にとっては、自らが通うキャンパスの弥生時代以来の歴史を知る初めての機会でもあり、長い歴史が積み重なっている事を実感していただくことができました。1日間の開催にも関わらず、学内外の100名を越える方々に観覧していただき、好評でありました。

こうした展示活動の結果、筑紫図書館で、今回作成したパネルを常設展示することが決定しました。平成21年11月1日の展示開始に向けて、現在書棚の一部撤去やパネル設置箇所の改装を行っています。また、展示解説冊子を日本語・英語・中国語・ハングルの4カ国語で作成しています。筑紫地区を訪れる海外の研究者に対して、キャンパスの歴史と埋蔵文化財調査研究活動の一端をご紹介出来るものになると考えております。今回の一連の展示活動が、筑紫地区の教職員だけでなく、内外の研究者や周辺住民の皆様が開かれた大学として、活用されるきっかけになったと喜んでいます。

最後になりましたが、期間中、ご来場下さった皆様には深く御礼申し上げます。筑紫図書館の常設展示でもお待ちしております。今回は、九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座、人文科学研究院考古学研究室、総合研究博物館などの関連機関の諸先生方、九州国立博物館、筑紫図書館などの諸機関の関係者の皆様のおかげで、一連の展示活動を実施できました。この場を借りて、お礼申し上げます。

(九州大学埋蔵文化財調査室・学術研究員)



筑紫図書館での展示設営(平成21年5月16日開催)

九州大学筑紫図書館での常設展示は
平成21年11月1日(日)オープン!!

常設展示室へようこそ:その6 九大博物館展示室を利用したワークショップ②

三島美佐子

まずはじめにご紹介するのは、2008年6月28日(土)に、総合研究博物館常設展示室で行った、「インクルーシブ・デザインワークショップ:一緒に九大博物館をデザインしよう!」です。ファシリテーターは、芸術工学研究院の平井康之准教授です。平井先生はこれまで、製品デザインなどの分野でこのワークショップ手法に取り組んできていましたが、博物館の展示室でのワークショップは、今回が初めての試みでした。

エクストリーム・ユーザー5名の方をリードユーザーとして、計25人が4チームにわかれ、展示室の観察、問題点の抽出と共有、アイデア出しなどをしていきます(下写真参照)。これまであまり気に留めずにいた段差や、展示物の高さなど、リードユーザーの反応やコメントをとりいれながら、問題点がどんどん指摘されていきます。チームで一緒に見て回ること、「なるほど、気がつかなかった」「そういう見方もあるのか」といった気づきが促されます。

指摘される問題点の数々は、当館としては耳が痛く悩ましいものばかりでしたが、今後のよりよい展示や博物館のあり方への改良につながると思えば、大変有り難いものです。例えば私は、展示室を3つのフロアにわけている2~3段の階段は、危ないけれども気をつけていれば大丈夫だろう、と思っていました。しかし、大勢の人が展示室に入って展示に集中していたり、車いすの方が段差側の通路を実際にとおったりしてみると、やはり若干危ないということがわかりました。この段差を活かし、また美観を保ちつつも、同時に危険でない状態にする工夫の必要性を認識することができました。

今回のワークショップでは、そのような個々の具体的な解決策を提案するというよりは、ワークや共有をとおして、新しい

コンセプトの博物館の全体像や展示の提案を自由に出してもらいました。

ワークショップとしては、参加者の皆さんには楽しんでもらえた様子で、「またこういうワークをやりたい」というコメントもいただきました。

その後、付箋紙に書かれた問題点を博物館で全てデータ化し、提案の書かれた模造紙も記録して分析することにしました。現在、データは平井ゼミに手渡され、それらを元に、平井先生とゼミ生の皆さんが、現在の展示室の根本的な問題解決とよりよい展示にむけた提案作りをすすめてくれています。

このワークショップから1年経った現在までに、平井ゼミとともに、学外の博物館でも同様なワークショップを重ね、博物館にとって有効なインクルーシブデザイン・ワークショップの手法改良などにも取り組んでいます。

次回は、同じような方法で子ども達と一緒にいったワークショップについて紹介いたします。

(総合研究博物館開示研究室・助教/植物系統学)



今回のワークショップと、その前日に開催されたセミナーの案内ポスター。図案はササコリです。



ワークショップの様子。①班ごとに、リードユーザーを中心として、展示室を観察して回ります。②気づいたことなどはどんどん付箋紙に書き込んで、挙げて行きます。それらをチームで共有してから、グルーピングしていきます。③今の展示と、それをこれからどうふうに変えたいかということ、イメージカードで表現します。④最終的な提案作りを前に、参加者がそれぞれ持っているアイデアやイメージを見える形(絵)にして、チーム内で共有します。⑤最後に、「こんな博物館だったらいいな」というアイデアを発表しあいます。

研究紹介:ライデンにあるオランダ商館員の 日本コレクションの調査

野藤 妙



写真1: ライデン国立自然史博物館の外観(左)と内部の展示(右).

2009年4月、シーボルトたちオランダ商館員による日本コレクションの調査(代表:宮崎准教授)に同向させていただけることになり、オランダにあるライデン国立民俗博物館とライデン国立自然史博物館を訪れました(写真1)。

江戸時代、オランダ商館員たちは、出島の外へ出ることも物を購入することも自由には出来ませんでした。商館員フィッセルはその著書の中で、たった一人の画匠の仲介によってしか絵を入手できないことを述べています。この画匠こそが長崎の絵師川原慶賀であると考えられています。カメラのない時代、商館員にとって慶賀の絵は日本を知る上でどんなに重要な資料であったでしょう。ブロムホフ、フィッセル、シーボルトの持ち帰った日本に関する絵のほとんどが慶賀によって描かれたものであり、その内容は、日本の風景、動植物、日本人の風俗など多岐にわたっています。そしてそれらの絵は、フィッセルやシーボルトの著作の中で活用されました。

シーボルトが収集した日本の動物のはく製やアルコール漬けなどの標本と慶賀のそれらの写生図は、ライデン国立自然史博物館へと収蔵されました。今回、ライデン

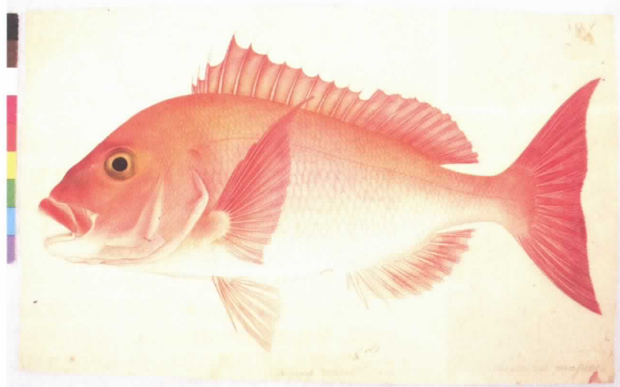


写真2: 「マダイ」川原慶賀筆、ライデン国立自然史博物館所蔵

国立自然史博物館では、『日本動物誌』の原画である慶賀が描いた魚類・甲殻類などの動物図の他、シーボルトの要請により絵師として来日したフィレニューフェによる動物図を撮影・計測し、材質を調査しました。生き物の多くは、標本にすると変色してしまうのですが、慶賀の絵は動物が生きていた当時の鮮やかな色彩で鱗や模様なども細密に描かれています(写真2)。

ライデン国立民俗学博物館(写真3)は、シーボルトの日本コレクションをもとに設立されており、その後、デン・ハーグに収蔵されていたブロムホフやフィッセルのコレクションも統合されました。現在、慶賀の作品の多くが所蔵されています。それらの作品の中でも、今回は、日本の風俗に関する作品(日本の職人・道具など)や植物・昆虫の図を中心に、撮影や計測、材質の調査を行いました。私は、慶賀の作品は人々の生活場面をカメラで撮影したかのようにあり、説明的であると感じました。外国の人々が日本を知るために描かれた慶賀の絵は、現在の私たちにとっても江戸時代の人々の生活を教えてくれる重要な史料であることを再確認しました。また、特別に補修室を見学させていただきました。裏打ち紙をはがした絹本の作品の裏面など、普段は見ることができない部分を見ることができました。

ライデンの博物館には江戸時代の日本に関する貴重な史料が多く収蔵されています。また、オランダ最古のライデン大学は、ヨーロッパで最初に日本研究のための学科が開設されており、ライデンは日本と非常に関係の深い都市と言えます。その深い関係を物語るように、2009年は日蘭通商400年にあたり、ライデンの町のあちこちに「ジャパン@ライデン」の看板が掲げられていました(写真3)。

(比較社会文化学府日本社会文化専攻・修士2年)



写真3: ライデン国立民俗学博物館の外観(上). 右は、町中で見かけた日蘭通商400周年記念行事「ジャパン@ライデン」の看板. シーボルト「日本植物誌」で有名な、アジサイの図があしらわれている。

アンケート調査のご報告

三島美佐子

昨年秋に、一般向けアンケートを実施しました。ご協力下さった皆様、どうもありがとうございました。

このアンケートは、学内の研究支援(P&P)を受けて実施されたものです。これからの大学博物館のあり方や、伊都での九大博物館はどのようなものがよいかを考えるために、利用者である皆さんからのご意見をうかがいました。以下に、その結果の一部をご報告いたします。

■ 回答者の構成

今回のアンケートでは、子ども向け、大人向けの2種類を実施しました。アンケートをお送りした対象は、これまで公開展示の会場などで住所・氏名を記帳され、当館から案内等をお送りさせていただいていた皆様です。

子ども向け		大人向け	
学年	回答数	年齢	回答数
小学生	85	66才以上	93
中学生	16	51～65才	95
高校生	1	36～50才	84
その他	5	22～35才	12
無回答	12	～22才	11
計	119	無回答	52
		計	347

■ 扱ってほしいテーマや内容は幅広い

伊都キャンパスへ移るまでの間、どんな展示やイベントをしてほしいですか？という問いに対しては、図1のような回答がありました。皆さんの興味あるテーマは人文系から科学系まで幅広く、また、九大そのものについても感心のあることがうかがえます。

展示の他にやってほしいことは？という選択では、サイエンスカフェやフィールド講座など、参加型のものに人気があることが伺えます。(図2)

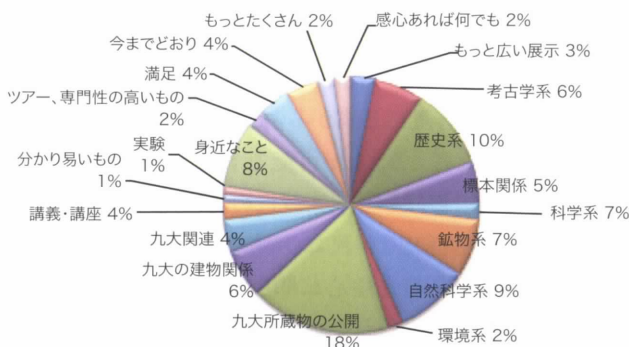


図1. 伊都キャンパスへ移るまでの間、どんな展示やイベントをしてほしいですか？ (大人向けより)

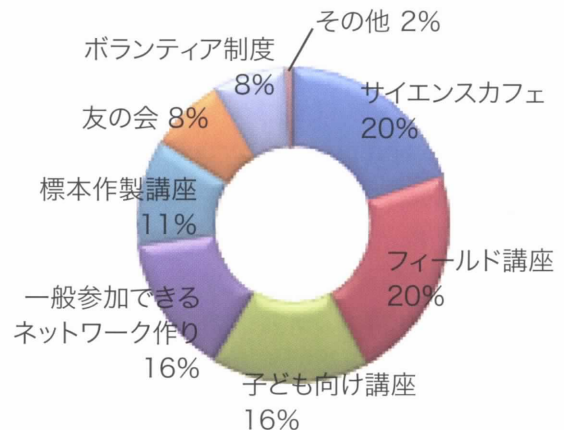


図2. 展示の他にやってほしいことは？ (大人向けより)

■ 博物館は、家の近くにあるのがいい！?

伊都キャンパスへの移転に際し、「市街から遠く離れてしまったキャンパスまで、皆さんわざわざ来てくれるのだろうか？」ということは、私達にとって大きな懸念の一つです。実際のところ、皆さんはどうお考えなのでしょうか(図3)。

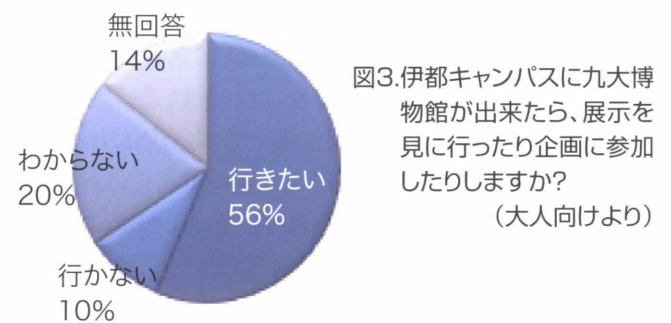


図3. 伊都キャンパスに九大博物館が出来たら、展示を見に行ったり企画に参加したりしますか？ (大人向けより)

思いのほか多くの方が「行きたい」とご回答下さり、少し安心しました。ここで、行きたい理由の一番は「近い」、反面、行かない・わからない理由の一番は「遠い」「交通の便が悪い」でした。家の近くか否かということは、博物館に行くか行かないかを定める大きな要因となっているようです。

■ たどりつけなかった九大博物館展示室・・・

では、現在一般公開されている常設展示室の見学については、どのような状況なのでしょうか(図4)。こちら、過半数の方がすでにお越し下さっており、大変有り難く思うと同時に、展示替えの必要性も感じさせられます。

大変申し訳なかったのは、見に来てくださったにも関わらず「場所がわからずあきらめた」というご回答が、少なからずあったことです。ご足労いただいたのに、申し訳ございません。現在は、地下鉄からすぐのところにある門からの道筋と、正門からの道筋に、博物館までの案内看板を設置しています。九大

